

## 八・九世紀における古代山城の展開と官衙・寺院

清田 美季

### はじめに

九州から瀬戸内を中心とした西日本には、七世紀後半の東アジアにおける軍事的緊張を背景に古代山城が築かれた。その多くは八世紀前半までには役割を終えて廃絶するが、西海道の大野城・基肄城・鞠智城は管理が続けられた。白村江の戦い後の唐・新羅の襲来という差し迫った脅威が去った後の八・九世紀の鞠智城について、本稿では寺院との関係から考えてみたい。

古代山城と寺院について最も注目される事例は、大野城とその山中に建立された四王寺である。八世紀後半、大野城には緊張関係にあった新羅への対応として、護国の力が期待された四天王像を安置する寺院が建立された。当初から寺院を城内もしくは近隣に建設することを前提として山城を構築している事例は現在までのところ確認することはできないが<sup>(一)</sup>、少なくとも四王寺建立と同時期まで機能していた古代山城については、大野城と同様に寺院が設けられた可能性がないのか検討する必要がある。鞠智城内に仏教施設が存在した可能性はないだろうか。

また、鞠智城の周辺には現在塔心礎が残る十蓮寺跡があるが、鞠智城との関係はどのようなものだったのだろうか。この点を検討するには、他の一般的な全国の郡家遺跡や東北地方の城柵とその周辺寺院との関係が比較対象として参考になると考えられる。播磨城山

城や備中鬼ノ城のように古代山城の周辺に白鳳期の寺院が存在する例もあるが、瓦が共通するなどの明確なつながりは確認できない。そうした山城周辺の寺院については今回は考察の対象としないものとする。

### 一・古代山城と寺院

#### (一) 大野城と四王寺

山城が築かれた後に寺院が建てられた例としては、大野城内に建てられた四王寺がよく知られている。多くの古代山城が機能を停止するなかで、基肄城・鞠智城とともに維持管理が続けられた大宰府北方の大野城では、築城時を彷彿とさせる新羅との関係悪化を背景に、新たな施設として寺院が創建された。

宝龜五年（七七四）、新羅が日本に対して行っていたとされる呪詛への対策のために、「新羅に直る高顯淨地<sup>あた</sup>」が選ばれて大野城内に四天王それぞれの堂が設けられ、一体ごとに一人の僧が配置されて法会を行うこととなった<sup>(二)</sup>。藤原仲麻呂による新羅征討計画が天平宝字八年（七六四）の仲麻呂失脚により頓挫して以降は、日本と新羅との関係が目立った問題は確認できないが、依然として一定の緊張状態にはあったものと推測される。四王寺創建の官符が出された翌日には、大宰府に入った新羅使が服属国としての礼をとらな

かったことからそのまま帰国させられており<sup>(三)</sup>、新羅使来着より四王寺創建官符が史料の日付上は一日先行することになるものの、この頃の新羅との緊張関係が形となって表れたのが四王寺創建や新羅使放還だったのではないか。

四天王法は厄災を祓い国家鎮護を祈願する修法で、新羅の呪詛への対応として適していると判断されたのであろう。四天王は東方の持国天、南方の増長天、西方の広目天、北方の多聞天<sup>(四)</sup>の四体一組で、現在城内の尾根上にそれぞれの堂が存在したと想定される場所は、安置された仏像の名を冠して呼ばれている。礎石群や井戸跡などが確認されている場所もあるが仏堂跡と確定している遺構はなく、寺院創建期の様相は不明である。延暦二〇年(八〇一)に一旦寺院としては廃止されて仏像や什物等などは麓の筑前国分寺へと移動されるが<sup>(五)</sup>、まもなく大同二年(八〇七)には戻された<sup>(六)</sup>。このときは僧の配置は行われなかったが、二年後に四天王法が再開され寺院としての機能を取り戻すことになった<sup>(七)</sup>。さらに弘仁二年(八一一)には新たに釈迦如来像も置かれている<sup>(八)</sup>。四天王法が再開された場所が「鼓峰」、釈迦安置場所は「鼓岑」と見えることから、四天王像・釈迦如来像ともに「鼓峰(鼓岑)」に安置されたものと考えられるが、具体的な場所は不明である。

その後の四王寺については、仁寿三年(八五三)五月に、観世音寺、弥勒寺(宇佐八幡宮の神宮寺)、四王院(四王寺)、香椎廟、大宰府管内の国分寺で大般若経が読まれている<sup>(九)</sup>。これは同年四月頃から流行していた天然痘への対策の一環として行われたものである。同年九月には天然痘患者に対して大宰府から賑給が行われており<sup>(一〇)</sup>、西海道でも流行していたことが確認できる。貞観八年

(八六六)二月には阿蘇大神の怒気によって疫病の流行や隣国との兵乱の脅威が心配されたため、四王寺で金剛般若経と般若心経の転読が行われている<sup>(一一)</sup>。これに類する出来事として、時代は降るが万寿三年(一一二六)には、宇佐八幡宮で起きた奇怪な事件から、兵革などを警戒して東海・東山・山陰・山陽・南海道では国分寺での仁王般若経転読を、西海道では国分寺に加えて四王寺も仁王般若経の転読が命じられている<sup>(一二)</sup>。四王寺は当初は新羅への対応から建立されたが、その後は国家安泰を妨げる様々な国内での事象への対応にもあたっていたことがわかる。弘仁二年に釈迦如来像が追加されたことで、四天王法以外にもより多様な法会に対応できる寺院になったのであろう。天慶六年(九四三)には、四王寺で仏像・堂舎が鳴動したため伊勢神宮に奉幣が行われたこともあった<sup>(一三)</sup>。こうした怪異への対応や四王寺自体の鳴動は特筆するべきこととして史料に残されたもので、これら以外にも、春秋二回の四天王法勤行などは恒常的に行われていたと考えられる。

大野城と同じく大宰府の防衛のために築かれた基肄城に関しても、山城と寺院が併存したのかは不明だが、城内に仏堂が存在した可能性がある。明確な遺構は存在せず、文献史料上からも確認できないが、山村信榮氏は「坊中山」「城山千坊」「伽藍座」「鐘撞」など、仏教との関連を思わせる地名が城内に存在していることから<sup>(一四)</sup>、何らかの仏教施設が存在した可能性を指摘する(山村一九九八)<sup>(一五)</sup>。ただしそれらの地名がいつ頃から存在するかは不明で、今後の調査・研究の進展が期待される。

他の古代山城については、廃絶する以前に城内に寺院を伴っていた痕跡は確認できていない。七世紀後半の唐・新羅襲来の可能性と



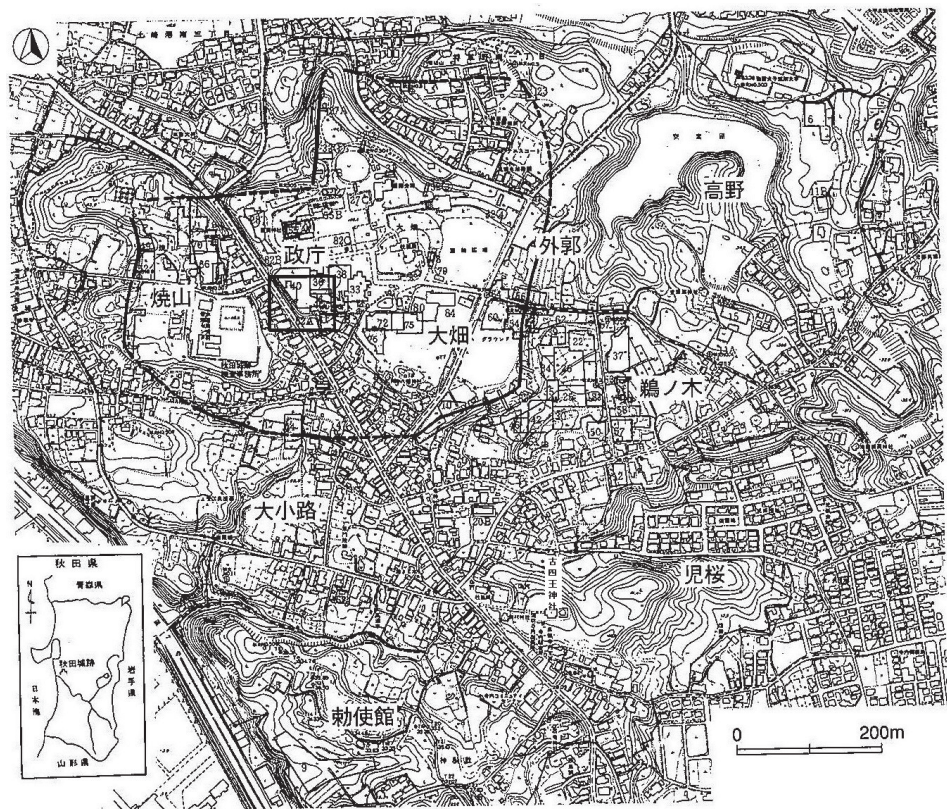
いう対外的な危機に対して、寺院を建立し国家の鎮護を祈願することとはあり得たと考えられるが、山城ですら未完成のまま廃絶に至った可能性も指摘されており（亀田二〇一四）、多くの山城では寺院が建立されることなく廃絶を迎えたのではないか。よって古代山城と寺院の関係を考えるにあたって、八世紀以降も山城としての機能を維持する中で大野城に建立された四王寺の存在は大変重要なものであると言える。

ここで注目されるのは、四王寺の建立は出羽国の秋田城、またその他日本海側の諸国でも確認できることである。これらの四王寺（四天王寺）建立にはどのような背景や意図があったのだろうか。

## （二）秋田城と四天王寺

七世紀から九世紀にかけて、東北地方では蝦夷征討が行われ城柵が築かれた。これまで東北地方の城柵と西日本の古代山城とは機能を異にするものと考えられ、別個のものとして扱われてきた（進藤二〇一〇）。すなわち、城柵は政庁をもつ当該地域の政治の中心で、政庁の発見されていない西日本の山城とは根本的に機能が異なるものである。しかしほぼ同時期の古代国家によって築かれた防衛に関わる施設という共通点があり、特に八世紀半ば以降は双方とも「城」と表記され、国家にとって一定の共通する認識があったことは確かである。

和銅二年（七〇九）を初見とする出羽柵は、和銅五年（七一二）の出羽国新設を経て、天平五年（七三三）に秋田村高清水岡に移され、やがて秋田城と称されるようになった。以後二百年ほど出羽国の軍事・行政の中心施設として維持された秋田城には、大野城と同



第1図 史跡秋田城発掘調査位置図

じく四天王を祀る堂舎が設けられ、現在秋田城跡の近隣の秋田市寺内には古四王神社が鎮座している。

秋田城の四天王寺の初見記事は天長七年（八三〇）正月癸卯（廿八日）条（二）で、出羽国を襲った地震により「四天王寺丈六仏像」と「四王堂舎」が倒壊したとある。秋田城跡でこれに該当すると考



第2図 多賀城・大崎平野周辺古代遺跡地図

えられている遺構は、外郭の外側南東部に隣接する鵜ノ木地区建物群（二七）で、八世紀末から九世紀第Ⅱ四半期にかけて堂舎風の建物が整備され、「寺」「玉寺」などの墨書土器も出土しており、寺院であった可能性が高い（伊藤二〇〇六）（二八）。寺院創建が八世紀末であるならば、ちょうどこの頃は宝亀五年（七七四）の蝦夷の蜂起から始

まった、いわゆる三十八年戦争の時期にあたり、秋田城もその混乱のさなかにあった。そうした不穏状況の克服、ひいては国家鎮護を祈るため、秋田城でも四天王寺が創建されたのであろう。

このように、大野城の四王寺創建ともあまり遠くない時期に秋田城での四王寺の建立が確認できたが、東北地方の他の城柵と寺院という観点から、陸奥国府であった郡山遺跡・多賀城とその付属寺院について触れておきたい。

古代国家は蝦夷に対して、軍事行動による制圧だけでなく、朝貢と饗応による服属儀礼を実施し、儒教や仏教による教化を重視して支配をより強固なものとした。そのために寺院の建立や俘囚の得度などが行われた（平川一九九二）。

郡山遺跡（宮城県仙台市）は、七世紀半ば頃から営まれた第Ⅰ期と、七世紀末から八世紀初頭にかけて営まれた第Ⅱ期の官衙が発見されている。第Ⅱ期官衙は多賀城創建前の陸奥国府と考えられ、この第Ⅱ期官衙の南方に隣接して営まれたのが郡山廃寺である。郡山廃寺は多賀城廃寺の前身寺院と考えられ、城柵に付属する寺院としての機能が多賀城廃寺に移った後も、発見される遺物の状況から、八世紀中葉頃までは存続していたと考えられている。

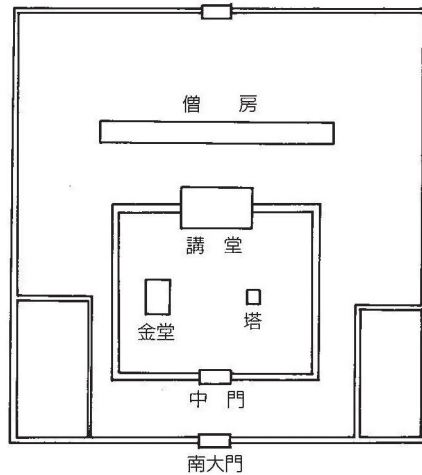
多賀城（宮城県多賀城市）は多賀城碑に神亀元年（七二四）の創建と記され、発掘調査の結果もこの記載と矛盾しない（平川一九九三）。多賀城廃寺は多賀城の南東一キロほどの台地上にあり、多賀城創建瓦と同じものを用いて造営された。伽藍配置は観世音寺式で、東側に塔（二九）、西側に金堂をもつ。多賀城廃寺より西に二キロ程度離れた山王遺跡から「観音寺」と記された墨書土器が発見され、付近に「観音寺」の可能性がある寺院は多賀城廃寺しか存在し



ないことから、多賀城廃寺の本来の寺院名は「観音寺」であった可能性が指摘されている（平川二〇〇〇）。またここからさかのぼって、多賀城廃寺と同様の伽藍配置を持つ郡山廃寺についても観音寺という寺院名であったと推測されている（今泉二〇〇六）。

このように、郡山廃

寺・多賀城廃寺は陸奥国府と密接な関係をもちながら運営された寺院である。伽藍配置・寺院名などを考えると、大野城や秋田城ではなく、西海道の政治の中心であった大宰府と、護国の力が期待された筑紫観世音寺（菱



第3図 観世音寺伽藍配置

田二〇〇五）との関係と比較するべきものであると言え、本稿ではこれ以上の詳細は控えたい。

秋田城では厄災を祓う四天王寺の建立によって護国の一助となることを祈願していた。大野城の四王寺とは祓われる厄災の内容が蝦夷なのか新羅なのかという相違はあるものの、国家鎮護を願って四王寺が建立されていたのである。

### （三）日本海側諸国の四王寺

四王寺が建立されたのは、秋田城だけにとどまらない。秋田城以外の日本海側諸国でも、特に九世紀後半以降、積極的に四王寺が建

立されている。また、現在秋田城跡の近隣に古四王神社が存在し、出羽国内に点在する古四王神社の起源が四天王寺や四王堂であると考えられること（虎尾一九八九）、置賜郡家ないしその関連施設である道伝遺跡から九世紀後半の四天王法の実施に関係するかと推測される木簡が出土し（平川一九八四）、出羽国内では秋田城以外でも四天王法が修されていた可能性がある。

貞観年間以降には、日本海側の諸国にも四天王を祀る堂舎が建てられたことが史料にみえる。その始まりとなったのは貞観九年（八六七）<sup>(一〇)</sup>、伯耆<sup>(一一)</sup>・出雲<sup>(一二)</sup>・石見<sup>(一三)</sup>・隠岐<sup>(一四)</sup>・長門<sup>(一五)</sup>に四天王の仏画を配布したことである<sup>(一六)</sup>。元慶二年（八七八）には因幡・伯耆・出雲・隠岐・長門で兵士の訓練と武器の修繕を行い、四天王像の前で調伏法が実施されている<sup>(一七)</sup>。この他にも、金沢市には「四王寺町」の地名が残り、また四王寺町の立地も日本海や河北潟を見下ろす尾根上に位置していることから、加賀国にも四王寺が建立された可能性が高い（鈴木一九九八）。

こうしたことなどから三上喜孝氏は出羽から北陸、山陰、西海道路に至る日本海側諸国で広く四天王法が修されていたこと、それも国単位ではなく郡単位にまで浸透していた可能性があることを指摘している（三上二〇〇四・二〇〇五）。日本海側では、現在史料で確認できる以上に、活発に四天王法が行われていた可能性がある。

しかし四王寺建立の動きは全国的に見られるわけではない。本尊が判明している古代寺院跡は少なく、史料上の制約という面もあるが、釈迦如来像や観音菩薩像などを本尊としてその周りに四天王像を配置するのではなく、四天王像を本尊とする寺院は他には確認できない<sup>(一八)</sup>。

こうした日本海側での四王寺創建の動きの背景にあったのは、九世紀後半に活発化した新羅海賊の脅威である。日本海側の諸国は海を挟んで新羅と向かい合い、特に西海道では新羅海賊による略奪の被害をたびたび受けており、その対策が求められていたと考えられる。

貞観五年（八六三）には石見国に新羅人の船が漂着し<sup>(二七)</sup>、貞観六年から七年には陰陽寮や天文博士から兵乱と疫病の流行への警戒が説かれ<sup>(二八)</sup>、貞観八年には肥前国基肄郡の人が新羅に武器製造技術を供与し対馬襲撃を計画したとして処罰されている<sup>(二九)</sup>。貞観九年に伯耆・出雲・石見・隠岐・長門の五カ国に四王寺が創建されたのはそうした中でのことであつた。同年一二月には宇佐八幡宮と北陸道諸国（若狭・越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡）に対して仏名会に使用する一万三千仏の仏画を配布している<sup>(三〇)</sup>。悔過を行って滅罪を祈ることで新羅海賊の脅威から逃れようとしたものである。特に政府にとつての衝撃が大きかったのは、貞観十一年（八六九）五月の新羅海賊船二隻が博多湾へ侵入し、豊前国からの調の絹・綿が略奪された事件<sup>(三一)</sup>で、一二月にはこの事件が、大宰府の政庁・門楼・兵庫の上に大鳥が現れた怪異や、肥後国の水害とともに伊勢神宮に報告されている<sup>(三二)</sup>。他にも、貞観から元慶年間にかけては新羅海賊への警戒措置として警備強化が図られ<sup>(三三)</sup>、日本海に面した諸国から兵庫などの鳴動報告が相次いだ<sup>(三四)</sup>。

以上のように、八世紀後半に新羅の呪詛への対抗として建立された大野城の四王寺は、後に広く国家安泰のための妨げとなる事象を退けるために運営されるようになった。同時期かやや遅れる程度の時期には秋田城には蝦夷との戦乱を背景に四天王寺が建立されたと

みられる。そして九世紀後半には、新羅海賊の活動活発化を受けて日本海側諸国に広まった。新羅海賊への対抗策として四天王法による調伏祈願が有効であると考えられていたのである。

後述するように、鞠智城の存在する肥後国でも九世紀後半には緊張が高まっていたと考えられる。そこで、大野城に四王寺が建てられた八世紀後半や、日本海側を中心に新羅海賊の脅威が迫り四王寺が建てられた九世紀後半以降における鞠智城の様相について、寺院建立という面から検証していきたい。

#### （四）鞠智城内の寺院

鞠智城内で出土した仏教関連の遺物としては、貯水池より出土した銅製菩薩立像が挙げられる。しかしこれは高さ一〇センチにも満たない小さな念持仏で、個人の崇拜物であろう。収納するための厨子が存在した可能性はあるが、この仏像を本尊とする仏堂が設けられていたとは考えにくい。

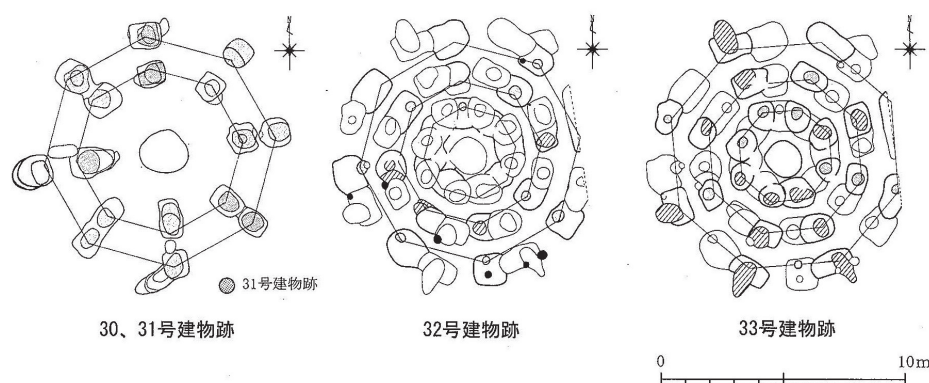
鞠智城内で仏堂の可能性がある建築物としては、二カ所で出土している八角形建物がある。現在、そのうちの二棟が三層の鼓楼として復元されているが、他の現存する八角形建物や現在確認されている八角形建物跡の多くは仏堂と考えられるため、鞠智城内の八角形建物跡についても仏教関連施設であつた可能性がないか検討したい<sup>(三五)</sup>。

八角形建物は、掘立柱建物の三二・三二号建物が、火災などのために失われ、短期間のうちにほぼ同じ場所に礎石建物三〇号・掘立柱建物三三号に建て替えられている。この二棟の八角形建物は、鞠智城が繕治された六九八年<sup>(三六)</sup>以降に建てられ、鞠智城の変遷時期



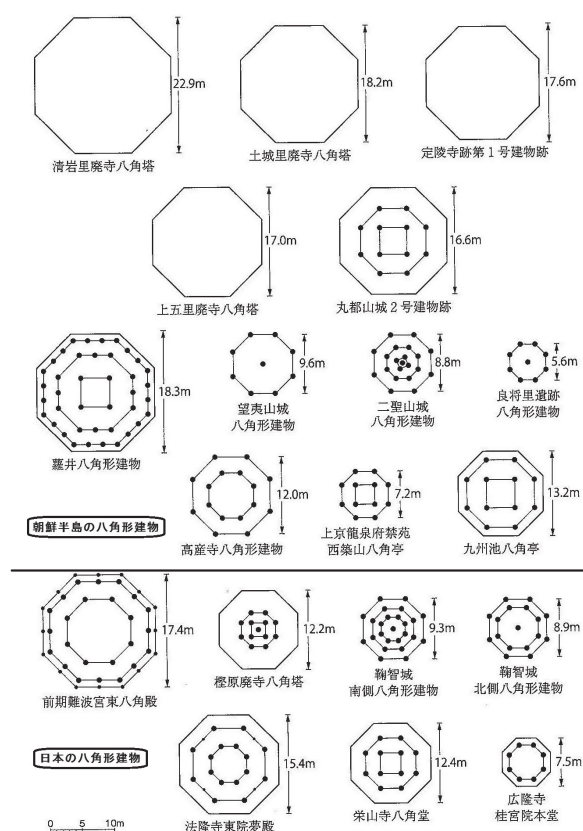
区分のⅡ期（七世紀末から八世紀初頭）からⅢ期（八世紀第一四半期後半以降）にかけて存在したと考えられており、大野城に四王寺が作られた時期には鞠智城内の八角形建物は廃絶していた可能性が高い。八角形建物が存在した七世紀末から八世紀第一四半期は、土器の出土量から、鞠智城に人が常駐し最も活発に活用されていた時期と考えられている。八世紀第二・三四半期は土器が出土しないことから人が常駐して城内で生活していた可能性は低い、掘立柱建物がより長期間の利用に耐えられる礎石建物に変更されていることから、この頃鞠智城の管理体制に何らかの変化があったものと考えられ、八世紀第二・三四半期には八角形建物自体は存続していた可能性もある。また一棟のみ礎石建物に改められたことからすれば、二棟の用途はそれぞれ異なっていたのかもしれない。

この二棟の八角形建物には心礎が存在し、その廻りを三〇・三一号建物は二重、三二・三三号建物は三重に礎石・柱が囲む構造になって



第4図 鞠智城八角形建物跡

いる。外径が一〇メートルに満たない程度の建物であることを考慮すると、内部は柱が密集して非常に狭く、仏像を安置するには適しているとは言いがたい。現存する八角形の仏堂である法隆寺夢殿（三七）、栄山寺八角堂（三八）、興福寺北円堂（三九）・南円堂（四〇）などでは、心柱を入らず、堂内の中央部分に本尊を安置できる場所を確保している。仮に鞠智城内の仏堂に安置される本尊が単体の仏像ではなく大野城のように四天王像であった場合、もしくは絵画であった場合などは、堂内に分散するなどして安置することができたかもしれないが、やはり狭く見栄えも悪い。仏堂ではなく塔だった可能性もあるが、広大な敷地になぜ仏塔のみの建立なのかという問題もあり、決め手を欠く（四一）。以上から、鞠智城内に仏教関連施設が存在した可能性は低いと考える。文献史料の面からも、八世紀後半創建の大野城の四王寺や九世紀



第5図 古代東アジア八角形建物比較図

後半創建の日本海側各地の四王寺のように、新羅への対応として鞠智城に四天王像が祀られた形跡は確認することができない。

八世紀第Ⅱ・Ⅲ四半期の鞠智城は、城内に礎石建物が出現し、第Ⅳ四半期にはその礎石建物が大型化することが確認されているが、建物の用途は倉庫であったと考えられる（熊本県教育委員会二〇一二）。大野城では宝龜五年（七七四）に新羅対策として四王寺が建立されたが、鞠智城ではそういった新羅対策の要素を見いだすことはできない。

新羅海賊の襲撃が起こるのは貞観年間以降だが、鞠智城では、それ以前の天安二年（八五八）<sup>（四三）</sup>の三例と、以後の元慶三年（八七九）

<sup>（四三）</sup>の一例、兵庫の鳴動が報告されている。天安年間では鞠智城の鳴動記事の他に兵庫の鳴動などといった記事は全国的に確認できず、鞠智城において直接的に新羅海賊を警戒したことの表れととらえることには慎重にならなければならないであろう。日本海側で本格的に新羅海賊の警戒を始めるのは貞観以降であり、仁寿二年（八五二）には京師・大和・越前・加賀・但馬・因幡・伯耆・隠岐・播磨・長門で甘露が降ったことが記録され<sup>（四四）</sup>、日本海側の諸国も多く含まれているが、甘露が降ることは天子が仁政を行なうめでたい前兆とされるもので、この時期に差し迫った新羅対策が求められていたとは考えにくい。

貞観年間以降、新羅海賊が問題となっている時期、貞観一七年（八七五）には、肥後国玉名郡の倉の上には大鳥二羽が集まり、菊池郡の倉の上では数百の鳥が群れて倉の葦草の引き抜くという怪事件が起き<sup>（四五）</sup>、肥後国が直接襲撃を受けたわけではなかったものの何らかの緊張状態にあったようである。元慶二年（八七八）にも肥

後国に大鳥が集結して、川の水が赤く変わったという怪異が報告されている<sup>（四六）</sup>。こうした怪異の報告は、貞観十一年（八六九）に新羅海賊が博多湾に侵入して豊後国の調綿などを略奪していることから、肥後国から大宰府へ納入する物品の安全が危ぶまれたことによる不安を背景とするのであろうか。そして、寛平五年（八九三）には、肥後国飽田郡も新羅海賊の襲撃を受ける<sup>（四七）</sup>のである。元慶三年の鳴動記事は、まさしく新羅海賊が大問題となっていた時期のことである。

新羅海賊の脅威に対しては、仏教による対応のほかにも、例えば貞観十一年には隠岐国の史生一員を廃止して弩師一員を置くことを決定するといった対応が行われ<sup>（四八）</sup>、肥後国でも昌泰二年（八九九）に「此国地接海崖、防備隣賊。」という事情から史生一員を廃して弩師が置かれている<sup>（四九）</sup>。寛平五年（八九三）の肥後国飽田郡の新羅海賊襲撃を受けての対応であろう。海賊への対応で弩師を配置するのであるから、有明海から遠く離れ目視確認することもできない鞠智城にこの弩師が配置されたとは考えられない。

以上見てきたように、大野城を初めとする日本海側諸国の積極的な四王寺整備を考慮すると、そうした形跡がない鞠智城は、八・九世紀の段階で新羅に対する実質的役割を期待されていたとは考えにくい。寛平五年には実際に肥後国飽田郡が新羅海賊によって襲撃されているが、それ以前の段階で、またそれ以降についても、兵庫の鳴動報告はあっても、有明海からの外敵の侵入を考慮して鞠智城で具体的な新羅海賊対策が講じられた形跡は、史料からも遺構からも確認することができない。大宰府から六〇キロ以上南に位置し、有明海からも遠いという鞠智城の立地もあって、鞠智城は大野城のよ



うに「新羅に直る高頭淨地」として認められなかったであろう。八世紀後半以降の対外的な危機は、鞠智城の機能に対して影響を与えた要因になったと考えることはできないのである。

したがって、八・九世紀の鞠智城の実態を考えるためには、他方面からの検討が必要だということになる。そこで鞠智城の役割に影響を与えた可能性のある要因として、在地の様相について寺院に着目しながら検討していきたい。

## 二・鞠智城と十蓮寺跡

### (一) 郡家・城柵と周辺寺院

鞠智城の周辺には八世紀半ば以降に建立されたと考えられている十蓮寺跡が存在し、これ以外には古代寺院は確認されていない。鞠智城と十蓮寺跡の関係を考える前提として、郡家・城柵と周辺寺院との関係をみておく。

全国の郡家周辺には、何らかの公的な役割を担っていたと考えられている寺院が存在する例が多数ある。郡家もしくは国府などの官衙と共通の瓦を使用するなど、官衙と密接な関わりをもつて建立されたこれらの寺院がどのような機能をもつ寺院であったのかは、官寺説・氏寺説など多くの説があり、定見には達していない（山中二〇〇五）。多くの場合は郡家に隣接し、離れていても一キロ程度の近距離に位置することが多いようである。美濃国武義郡の弥勒寺と弥勒寺東遺跡、美作国久米郡の久米寺と宮尾遺跡のように、狭い土地に寺院も含めた立地計画が立てられている場合もある。

全国の郡家遺跡とその周辺寺院跡について、双方とも判明している例を第1表に示した。それらの地理的な関係については、標高差

はほぼない場合が多く、差がある場合でも、郡家のほうが標高が高くやや見晴らしの良い場所に建てられることが多い。

東北の郡山遺跡・多賀城以外の城柵でも、周辺寺院が確認されている例がある。養老四年（七二〇）に按察使が殺害されるなどの大規模な蝦夷の反乱が起こり、天平九年（七三七）までに多賀城から三五キロほど北方に広がる大崎平野には玉造柵など五柵が設置された<sup>（五〇）</sup>。陸奥国府が郡山遺跡から多賀城へ移転するなど古代国家の蝦夷政策に大転換が図られる中でのことである。これらの城柵は郡家としての性格も持ち合わせながら設置され、周辺には寺院が営まれていた。それが菜切谷廃寺（加美町）、伏見廃寺（大崎市）、一ノ関廃寺（色麻町）の三寺である（第2図）。

菜切谷廃寺は色麻柵・色麻郡家と推定される城生遺跡（加美町）から一キロ程度の場所にある。伏見廃寺は、玉造柵などと考えられる名生館官衙遺跡<sup>（五一）</sup>（大崎市）から一キロほど離れた場所に位置し、創建瓦には名生館官衙遺跡の同範瓦も使用されている。一ノ関廃寺についても、現状では不詳だが周辺に城柵・郡家などの官衙遺跡が存在すると推測されている。菜切谷廃寺と城生遺跡、伏見廃寺と名生館官衙遺跡とは、それぞれ標高差はほとんどない。

この三つの寺院については、七世紀末から八世紀初頭の創建瓦が相互に共有関係をもち、同時期に共通する意図のもとで創建されたこと、また多賀城創建期には、大崎平野の日の出山瓦窯で焼かれた多賀城創建瓦を利用して補修され、郡山遺跡から多賀城への陸奥国府移転という情勢の中で、陸奥国府からの支援があったと考えられること、さらに八世紀後半に行われた補修でも瓦を共有し、この時も三寺同時に補修されたことなどが指摘されている。いずれも金堂

第1表 古代山城と寺院

国名	郡名	寺院名	郡家からの距離(注1)	郡家との標高差(注2)	郡家遺跡名
三河	渥美	市道廃寺	隣接	3m以下	市道遺跡?
遠江	敷智	九反田遺跡	隣接	3m以下	伊場・城山・梶子北遺跡?
	富士	三日市廃寺	0.6km	-14m	東平遺跡
	足下	千代廃寺	0.8km	-6m	下曾我?遺跡
相模	高座	下寺尾廃寺	隣接	3m以下	下寺尾西方A遺跡
	鎌倉	千華地廃寺	隣接	-19m	今小路西遺跡
武蔵	多磨	多磨寺(京所廃寺)	隣接	3m以下	武蔵国府京所地区
	橘樹	影向寺跡	隣接	3m以下	千年伊勢山台遺跡
	播羅	西別府廃寺	隣接	3m以下	播羅遺跡
	憊澤	岡廃寺	隣接	7m	中信遺跡
上総	武射	真行寺廃寺	隣接	-13m	島戸車遺跡
下総	埴生	龍角寺廃寺	0.6km	3m以下	大畑I遺跡
	結城	結城廃寺	2.9km	-7m	峯崎遺跡?
常陸	新治	新治廃寺	隣接	3m以下	古郡遺跡
	筑波	中台廃寺	隣接	4m	平沢官衙遺跡
	河内	九重東岡廃寺	0.9km	15m	金田西・金田西坪B遺跡
	茨城	茨城廃寺	隣接	3m以下	外城遺跡?
	那珂	台渡里廃寺	隣接	3m以下	台渡里遺跡
	久慈	長者屋敷廃寺	隣接	3m以下	長者屋敷遺跡?
近江	栗太	栗太寺(手原遺跡)	2.2km	-22m	岡遺跡
	高嶋	日置前廃寺	0.9km	11m	日置前遺跡?
美濃	武義	弥勒寺	隣接	4m	弥勒寺東遺跡
信濃	埴科	雨宮廃寺	1.0km	3m以下	屋代遺跡群?
上野	佐位	上植木廃寺	1.3km	10m	三軒屋遺跡
	新田	寺井廃寺	0.6km	3m以下	天良七堂遺跡
下野	芳賀	大内廃寺	0.7km	3m以下	堂法田・長者ヶ平・中村遺跡?
	那須	浄法寺廃寺	0.6km	-4m	那須官衙遺跡
陸奥	白河	借宿廃寺	1.7km	7m	関和久・関和久上町遺跡
	磐梯	上人壇廃寺	隣接	3m以下	栄町遺跡
	安達	郡山台廃寺	0.6km	4m	郡山台遺跡
	信夫	腰浜廃寺	0.6km	3m以下	北五老内遺跡
	名取	郡山廃寺	隣接	3m以下	郡山遺跡
	磐城	夏井廃寺	隣接	-9m	根岸遺跡
	標葉	郡山五番遺跡	隣接	-14m	郡山五番遺跡
	行方	泉廃寺跡館前地区	0.7km	-4m	泉廃寺跡家前地区
	宮城	多賀城廃寺	1.2km(多賀城から)	-11m(多賀城から)	
	賀美	菜切谷廃寺	0.9km	3m以下	城生柵
	玉造	伏見廃寺	1.2km	-8m	名生館官衙遺跡
越前	丹生	大虫廃寺	0.8km	3m以下	高森遺跡?
		深草廃寺	2.0km	-10m	
	氷上	三ツ塚廃寺	5.5km	-14m	七日市遺跡?
因幡	八上	土師百井遺跡	0.9km	3m以下	万代寺遺跡
	気多	上原南遺跡	隣接	3m以下	上原遺跡
		寺内廃寺	0.7km	-13m	(評衙は戸島遺跡?)
伯耆			3.6km 4.8km(国府から)	3m以下 -24m(国府から)	不入岡遺跡?
	八橋	育尾廃寺	隣接	3m以下	大高野遺跡
	会見	坂中廃寺	0.7km	14m	長者屋敷遺跡
		大寺廃寺	1.6km	-14m	
播磨	多可	多可寺廃寺	0.7km	3m以下	思い出遺跡?
美作	勝田	勝間田・平(?)	隣接	3m以下	勝間田・平遺跡
	久米	久米寺	隣接	12m	宮尾遺跡
備中	英賀	英賀廃寺	1.9km	3m以下	小殿遺跡
備後	三次	寺戸廃寺	3.0km	-48m	下本谷遺跡
安芸	高宮	明官地遺跡	隣接	5m	明官地東遺跡
伊予	久米	来住廃寺	隣接	3m以下	久米高畑遺跡
	上座	長安寺廃寺	1.1km	13m	井出野・八並遺跡
筑後	御原	上岩田廃寺・井上廃寺	(注3)		小郡官衙・下高橋官衙遺跡
	御井	へボノ木遺跡	隣接	3m以下	へボノ木遺跡
肥前	神埼	辛上廃寺	0.7km	3m以下	馬郡・竹原遺跡
	玉名	立願寺廃寺	隣接	9m	立願寺遺跡
肥後	山鹿	中村廃寺	2.4km	3m以下	桜町遺跡
			1.5km 2.5km(鞠智城から)	19m -77m(鞠智城から)	西寺遺跡
豊前	上毛	垂水廃寺	1.4km	-10m	大ノ瀬官衙遺跡
	下毛	相原廃寺	1.3km	-15m	長者屋敷遺跡

距離・標高差ともに地図ソフト「カシミール3D」を利用して算出した概算値である。

(注1) 外郭が不明で隣接するかわからないものも遺跡同士の距離が0.5km以下の場合には「隣接」とした。

(注2) 高低差が0～3mの場合は誤差も考慮して「3m以下」とした。

標高差が「-14m」の場合、寺院が郡衙よりも14m低いという意味である。

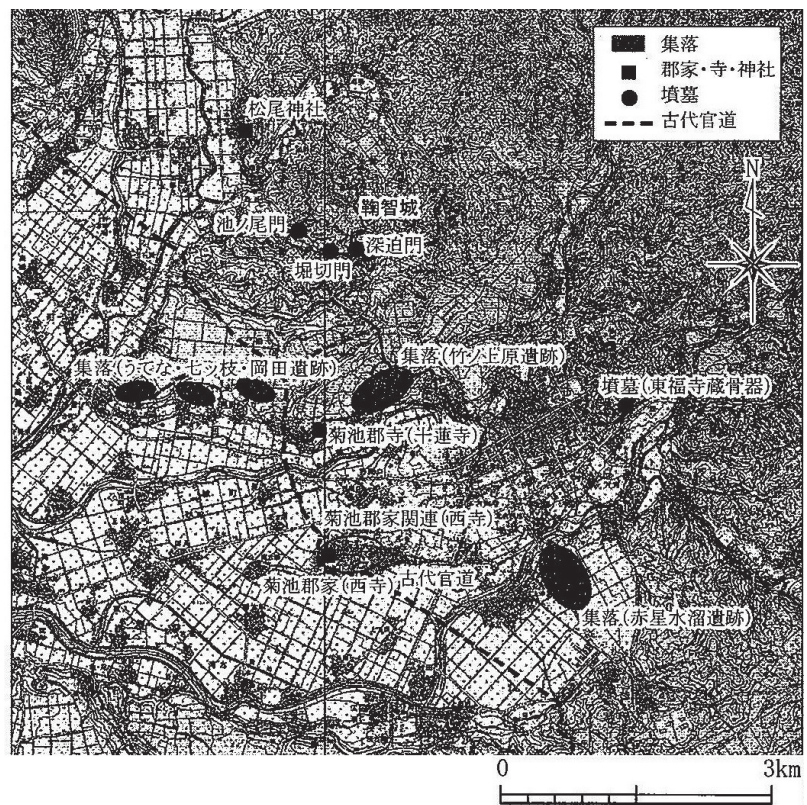
(注3) 時期により官衙・寺院の組合せが諸説あるため数値は省略する。



一堂のみと考えられる小規模な寺院であるが、郡という単位を越えて国府の権力によって整備された寺院である。大崎平野には七世紀後半から八世紀初頭にかけて、主に東国から移住した柵戸が配されたと考えられ（今泉一九八九）、こうした移民の生活は時に蝦夷たちとの間に対立が生じる不安定な要素をもっていたと思われる。移民たちにとっても、寺院の存在は精神的な支柱として必要とされたのである。城柵・官衙に付属する形で建立された寺院は、蝦夷たちの教化や蝦夷たちに対して支配者である古代国家の威容を示すもの、また古代国家が支配領域を広げていく際の社会の安定をはかるものとして機能したと考えられる（五）。

## （二）十蓮寺跡と菊池郡

鞠智城の南側に広がる丘陵地には、塔心礎が残る十蓮寺跡が存在し、菊池郡家に付属する「郡寺」ではないかと推測されている。「十蓮寺」の名称の由来は不明で、一八世紀後半に編纂された『肥後国誌』には「里俗云、文安元年（一四四四）菊池兼朝（？）（一四四四）建立ノ庵跡也ト。寛永五年（一六二八）廃跡ニ天神ヲ祀リ、大木アリシヲ神木トシテ十連木天神ト号ス。今ヤ此大木朽倒レ古株ヨリ生立セシ樗ノ木繁茂セリ。此近傍ノ畑ヲ掘レハ布目古瓦ノ缺多ク出ルト云。」（カッコ内は筆者注記）とあるのみで、古来瓦が出土する地点であるということは知られていたが、寺院跡であるという伝承は見えない。この十蓮寺跡は、発掘調査は部分的に行われているものの報告書が出されていないため詳細は不明な点が多いが、現存する塔心礎は現在地よりも二〇メートルほど東が原位置で、大きさから推測して三重塔であるとされる。また、瓦の堆積と



第6図 鞠智城・十蓮寺跡・西寺遺跡

土層の変化から、塔の西側に金堂があったと推定されている（五三）。寺院が存在した時期については、出土した瓦から、松本雅明氏は奈良時代中期の創建で、奈良時代末に補修を行い、平安時代初期に焼亡したがその後瓦を使わずに再建されたと推測している（松本一九六五b）。また広瀬正照氏は、やはり瓦の検討から奈良時代後期から平安時代中期頃まで存続したと推測する（広瀬一九八四）。ここでは、早くても奈良時代中期の創建で、平安時代中期まで存続したものと見ておく。

この十蓮寺跡と鞠智城との関係については、鞠智城から十蓮寺跡へは、深迫門あるいは堀切門から出入りすると考えると一旦谷川の流れる迫地に下り、また上った丘陵の南端に、南を正面として十蓮寺跡が位置している。堀切門からは一・九キロ、深迫門からは二・一キロ、標高差はどちらの門からも十蓮寺跡のほうが六〇メートルほど低い位置にある。鞠智城からの便を優先するのであれば、迫地を挟んだ丘陵上の南端ではなく、より鞠智城に近い場所に建立されるのではないか。立地から考えて、単純に鞠智城に付属する寺院と捉えることは難しい。

それでは、十蓮寺跡と菊池郡家の関係はどのようなものであろうか。菊池郡家は、十蓮寺跡から南へ一・五キロほど離れた菊池盆地の平野部に位置する西寺遺跡と推定されている。現在では判然としなくなっているが、かつて郡家想定地の北側・西側には土塁が残っていたという（松本一九六五a）。また、南西三〇〇メートルほどにある南園地区では多量の布目瓦が出土しており、瓦の年代は八世紀末から九世紀初頭と推定されている。実際の郡家整備は瓦の年代に先行し奈良時代には周辺に菊池郡家が存在したと考えてよいだろう。菊池郡家推定地（西寺遺跡）と十蓮寺跡は、距離は一・五キロ、標高差は一九メートルほど十蓮寺跡のほうが高い位置にある。菊池郡家推定地と十蓮寺跡の位置関係は、前節で確認した郡家と寺院との高低差についての全国的な傾向とは逆なのである。一方、十蓮寺跡から鞠智城長者原地区までは二・五キロ、標高差は谷を挟んで七七メートルほど鞠智城のほうが高い位置にある。これもまた、典型的な郡家あるいは城柵と寺院との関係とは異質である。

十蓮寺跡は、鞠智城の存在を前提に、菊池郡家から鞠智城へ向か

う経路沿いの、見晴らしの良い丘陵上に建立されたものと思われる。菊池郡家は、菊池郡内を通る「車路」と称される重要な交通路（鶴嶋一九九七）に沿った地点に設けられたと考えられるが、丘陵から降りた平地に位置している。八世紀後半頃から菊池郡内にはうてな遺跡や深川遺跡などの集落遺跡が形成され、人口が急激に増加してくる（能登原二〇一四）。この時期は菊池平野に限らず肥後国の生産力が大幅に向上したようで、肥後国は延暦一四年（七九五）には大国に昇格している<sup>（五四）</sup>。十蓮寺跡は交通の便から選ばれた平地の郡家に対して、集落からよく望むことができる高い位置に三重塔と金堂を備えた荘厳な寺院を建てたものと考えられる。そのことによって地域の支配者である郡司の権威を示そうとしたものなのではないか。

八世紀、鞠智城の南側の菊池郡では郡家が整備され、多くの集落が形成され、丘陵上には寺院も創建された。鞠智城では八世紀第Ⅱ四半期に城内の建物が礎石建物へと建て替えが行われるが、土器が出土しないことから人が常駐し管理する体制ではなくなっていたと推測される。第Ⅳ四半期には礎石建物が大型化し、再び土器が発見されるようになる。この時期の使用土器について見てみると、八世紀第Ⅰ四半期までに使われていた様々な生産地からもたらされた須恵器と畿内系の土師器は八世紀第Ⅳ四半期には使用されなくなり、玉名郡の荒尾窯跡群産の須恵器と在地系土師器が大部分を占め、九世紀以降は在地系土師器のみが使用されるようになる（熊本県教育委員会二〇一二）。このことから、鞠智城に対する肥後国、そして菊池郡の関与が深くなったと考えられる。八世紀第Ⅳ四半期以降は城内に多数の倉庫が作られ、また九世紀には兵庫と不動倉が存在し



たことが史料から確認されている。これらの倉の管理には、菊池郡司などの在地勢力が関与していたと推測される<sup>(五五)</sup>。

八世紀半ば以降、菊池郡内各所で形成された集落の発展を背景に在地の有力者層も成長し、菊池郡家と関連する寺院が郡内に必要とされた。そのため十蓮寺跡として残されている古代寺院が、鞠智城の存在を意識して鞠智城を背後に頂いた丘陵上に創建されたのではないだろうか。

## おわりに

八・九世紀における鞠智城の機能の変化について、推論を重ねた検討となったが、鞠智城内の仏教施設の有無、周辺の寺院の様相から、八・九世紀の鞠智城は新羅などの外敵に対応する性格を強く有する施設ではなかったことを明らかにした。また、八世紀の後半頃から菊池郡など在地勢力の力が拡大し、鞠智城の倉庫管理などを担い運営していたことから、鞠智城の存在を意識した立地の寺院が建立されたことを論じた。鞠智城は対外的な危機に対応する施設としての要素は薄れたが、倉庫として活用されるなかで地域社会では一定の重要性を維持し続けたのである。

今回の考察の対象外としたが、古代山城周辺に存在した白鳳寺院や、山城廃絶後の山城跡地への寺院建立などから、古代山城と在地の関係をより具体的に考えることは可能であると思う。それはまた鞠智城と在地の関係にも敷衍して検討することができるかもしれない。古代山城と在地との関係は、今後の課題として検討を続けていきたい。

## 注

(一) 鬼ノ城(岡山県総社市)や大廻小廻山城(岡山県岡山市)、屋嶋城(香川県高松市)などでは平安時代以降に城内に寺院が作られるが、すでに八世紀前半までには城としての機能を停止しており、寺院の選地に城の存在は直接は考慮されなかったと考えられるので、今回の考察対象とはしない。

(二) 『類聚三代格』宝龜五年(七七四)三月三日太政官符

(三) 『続日本紀』宝龜五年(七七四)三月癸卯(四日)条

(四) 多聞天が単体で祀られる際は、毘沙門天と呼ばれる。現在四王寺山には毘沙門堂が存在する。

(五) 『類聚国史』延暦廿年(八〇一)正月癸丑(廿日)条

(六) 『類聚国史』大同二年(八〇七)二月甲寅朔日条

(七) 『類聚国史』大同四年(八〇九)九月己卯(二日)条

(八) 『日本後紀』弘仁二年(八一一)二月庚寅(廿五日)条

その後は、四王寺での悔過は観世音寺講師が勤めることが定められ(『平安遺文』四九〇〇「弘仁十一年三月四日大宰府牒案」)、また嘉祥年間には入唐を希望する円珍が便船を待つて四王寺に滞在していたこと(『平安遺文』四四六四「肥前国講師某解案」、四四九二「円珍奏状」、四四九四「太政官牒」)などによつて四王寺の存在が確認できる。

(九) 『日本文徳天皇実録』仁寿三年(八五三)五月壬寅(一三日)条

(一〇) 『日本文徳天皇実録』仁寿三年(八五三)九月辛丑(一四日)条

(一一) 『日本三代実録』貞観八年(八六六)二月一四日庚申条

阿蘇山はこの頃火山活動を活発化させており、貞観六年には肥後国阿蘇郡の健磐龍命神霊池が音を出して揺れ、池の水が沸騰して周囲にあふれ出たことが記され(『日本三代実録』貞観六年(八六四)十二月廿六日己卯条)。

翌年にはこの怪異の報告と奉幣が宇佐八幡宮に対して行われている（『日本三代実録』貞観七年（八六五）二月一四日丙寅条）。

（一二）『類聚符宣抄』万寿三年（一〇二六）五月一三日太政官符

（一三）『日本紀略』天慶六年（九四三）八月二日戊申条

（一四）田平徳榮氏は、地名以外に寺院の存在した形跡が見られないことから、大野城の四王院と混同した伝承による地名であるとする。出土した「山寺」の墨書土器も外部からの持ち込みと評価するが、具体的な根拠には言及されていない（田平一九九三）。

（一五）山村信榮氏は史料にあらわれる「城山」を基肄城のことであるとして、基肄城内の仏教施設の存在を説明するが、平安時代に大野城のことを「城山」と表記する例が多数存在し、史料から基肄城の仏教施設の存在を証明することはできない。

（一六）『類聚国史』一七一地震 天長七年正月癸卯（廿八日）条

（一七）鶴ノ木地区は城外ではあるが、祭祀遺跡、水洗厠舎跡、竪穴住居跡、井戸跡、鍛冶遺構などが存在している、秋田城の活動を支える重要な区画である。

（一八）八世紀については、寺院の建物配置に当てはめられるような掘立柱建物跡が発見されているが、寺域を区画する塀が存在しない、塔がない、礎石立ちではなく瓦も葺かれていないなど、寺院と考えるには問題となる点も指摘されている（伊藤二〇〇六）。したがって鶴ノ木地区に四王寺があったと考えた場合、八世紀末、大野城の四王寺より若干遅れる時期の創建と考えることができる。

（一九）この多賀城廃寺の特徴の一つに、三重塔の基壇が現在残っているだけで三メートルほどあり、異様に高いということにある。このようになった理由を景観的な観点から分析した堀裕氏は、多賀城内の官人・蝦夷たちや、

多賀城南方の陸路・海路、そして多賀城西面の街区から、それぞれ多賀城廃寺の塔がよく見えるように設計されていると説明する。そしてそのことは、多賀城廃寺だけでなく国府多賀城の威容を示す機能を持っていたとしている（堀二〇一三）。

（二〇）『日本三代実録』貞観九年（八六七）五月廿六日甲子条

（二一）伯耆国府北側の四王寺山の山頂に四王寺跡が残る。

（二二）島根県松江市山代町に「師王寺（しわじ）」の地名が残り、『出雲国風土記』に記された意宇郡山代郷南新造院とされる寺院跡がある。これが後に四王寺に転用されたものと考えられている。山代郷南新造院は出雲国府と同所に存在したと考えられる意宇郡家から二里（約八キロ）ほど離れた場所にあり、飯石郡少領出雲臣弟山が創建した。出雲臣弟山は、天平一八年（七六四）に出雲国造になっている（『続日本紀』天平一八年三月己未（七日）条）。

（二三）現在、山口県下関市長府の四王司山に、毘沙門天を祀る四王司神社がある。長門国府は、遺構は発見されていないが四王司神社から三キロほど南の下関市長府宮の内町の忌宮神社付近かと推測されている。『日本三代実録』貞観一五年（八七三）十一月七日戊辰条に「詔賜長門国四王院沙弥教勝・教林二人度。先是、貞観九年始置前件四王院、安置四僧。教勝等預在四人之内。仍特度之。」とあって、長門国の四王院には沙弥が配置されており、教勝・教林の二人は特別に得度が許されて正式な僧侶となった。沙弥ではなく正式な僧侶を配置することでより強力な調伏効果を狙ったのではないか。

（二四）『延喜式』では、出羽国では四天王法修法の僧供養料など、伯耆・出雲・長門の三カ国では四王寺での修法料などについて当国の正税から支出することを定めている。

(二五)『日本三代実録』元慶二年(八七八)六月廿三日丁亥条

(二六)四天王や梵天・帝釈天などの天部は仏教を守護する神で、毘沙門天や吉祥天などを祀る堂を設けることはあるが、寺院全体の本尊として祀られることは少ない。例えば、西大寺には四王堂が存在するが、寺院の中心的堂舎である金堂院には薬師金堂と弥勒金堂があり、また堂舎名が四王堂であつても「西大寺資財流記帳」では筆頭に火頭菩薩像が挙げられており、堂の中心には火頭菩薩が安置されていたと考えられる。

(二七)『日本三代実録』貞観六年(八六四)二月一七日甲戌条に、「去年」のこととして見える。

(二八)『日本三代実録』貞観七年(八六五)正月四日丙戌条

(二九)『日本三代実録』貞観八年(八六七)七月一五日丁巳条

(三〇)『日本三代実録』貞観九年(八六八)一二月一九日甲申条

(三一)『日本三代実録』貞観一一年(八七〇)六月一五日辛丑条

(三二)『日本三代実録』貞観一一年一二月一七日庚子条

(三三)『日本三代実録』貞観一五年(八七三)三月一九日癸未条、元慶四年

(八八〇)二月廿八日壬子条、元慶四年六月一七日己亥条

(三四)貞観八年若狭国、貞観一三年壹岐島、元慶四年隠岐国、元慶五年加賀国など。日本海に面していない国からの鳴動報告としては、貞観八年(八六七)の美作国、仁和二年(八八六)の山城国石清水八幡宮からの報告がある。

(三五)鞠智城の八角形建物に影響を与えた可能性のある建築物として、朝鮮半島の多角形建物がある。これについては、すでに田中俊明氏が検討しており、それによると、高句麗・新羅で八角形建物が発見されているが、仏堂のほかには始祖廟、社稷壇、天壇などとして建てられていたといい、用途は諸説あつて一定しないようである(田中二〇一四)。

(三六)『続日本紀』文武天皇二年(六九八)五月甲申(廿五日)条

(三七)八世紀中頃の創建で、後世の修理により屋根の形状などに変更があるが、概ね創建時のまま現存する。

(三八)八世紀後半の創建で、創建時の建物が残る。

(三九)創建は八世紀前半、現存の建物は一三世紀の再建。

(四〇)創建は九世紀前半、現存の建物は一八世紀末の再建。

(四一)向井一雄氏は、国内の現存・非現存の多角形建物、郡家の多角形建物との比較、さらに朝鮮の二聖山城の八角形建物が硯や筆などの倉庫であつた可能性が近年指摘されていることから、鞠智城の八角形建物も特殊な物品を納める倉庫であつた可能性を指摘している(向井二〇一四)。郡家における多角形建物としては、佐位郡家とされる三軒屋遺跡(群馬県伊勢崎市)の八面甲倉、那須郡家とされる那須官衙郡(栃木県那珂川町)の六角形建物、渥美郡家とされる市道遺跡(愛知県豊橋市)の六角形建物がある。遺構から仏教施設と推測される建物跡としては檜原廃寺八角塔(京都市)や栢杜遺跡八角円堂(京都市)が挙げられる。檜原廃寺八角塔については心礎の状況から塔であつたことが確実だが、栢杜遺跡八角円堂は堂内部、特に内陣の様子は不明確で比較検討することができない。

(四二)『日本文徳天皇実録』天安二年(八五八)閏二月丙辰(廿四日)条

「肥後国言。菊池城院兵庫鼓自鳴。」

『日本文徳天皇実録』天安二年(八五八)閏二月丁巳(廿五日)条

「又鳴。」

『日本文徳天皇実録』天安二年(八五八)六月己酉(廿日)条

「又肥後国菊池城院兵庫鼓自鳴。同城不動倉一字火。」

(四三)『日本三代実録』元慶三年(八七九)三月一六日丙午条

「又肥後国菊池郡城院兵庫戸自鳴。」



(四四)『日本文徳天皇実録』仁寿二年(八五二) 五月是月条

(四五)『日本三代実録』貞観一七年(八七五) 六月廿日辛未条

この菊池郡の倉が、鞠智城内に設けられたものなのか、また別個に存在するものなのかは議論があるが、断定することは難しい。

(四六)『日本三代実録』元慶二年(八七八) 二月廿二日癸未条

(四七)『日本紀略』寛平五年(八九三) 閏五月三日庚午条

(四八)『日本三代実録』貞観一一年(八六九) 三月七日乙丑条

(四九)『類聚三代格』昌泰二年(八九九) 四月五日太政官符

(五〇)『続日本紀』天平九年(七三七) 四月戊午(一四日) 条

(五一)和銅六年(七一三) 建郡の丹取郡家、さらに天平九年(七三七)には設置されていることが確認できる玉造柵、そして玉造郡家となったと考えられている。

(五二)陸奥国内には他にも桃生城、伊治城、胆沢城、志波城、徳丹城などの城柵が八世紀以降に設けられたことが知られているが、これらの城柵に関しては、付属寺院と目される仏教施設は確認されていない。九世紀以降については、大同三年(八〇八)までに鎮守府が多賀城から胆沢城に移されたとされ(鈴木拓也一九八四)、九世紀中頃、鎮守府が奥六郡の支配を担うより行政的な組織に変化した時期に創建された国見山廃寺(岩手県北上市)について、胆沢城鎮守府に付属する寺院として営まれたのではないかという議論もあるが(菅野二〇〇五)、確定できない点が多い。

(五三)発掘調査を行った松本雅明氏は法起寺式伽藍配置を想定しているが、中門・講堂・回廊・僧坊は未検出で、南大門の存在についても明確に記していない。かつて講堂跡と目される箇所礎石があったというが、発掘調査の時点ですでに撤去されていて確認されていない。法起寺式と呼べるほど伽藍が整えられていたのかは不明とするよりない。

(五四)『日本紀略』延暦一四年(七九五) 九月乙卯(廿一日) 条。『延喜式』民部式でも肥後国は西海道唯一の大国である。

(五五)向井一雄氏は九世紀以降も鞠智城の倉庫群が存続していた理由として、弘仁一四年(八二三)から実施された公営田の存在を指摘する(向井二〇一四)。肥後国のみ嘉祥三年(八五〇)、斉衡二年(八五五)に公営田経営の継続が許可されており(『類聚三代格』斉衡二年一〇月廿五日太政官符)、大宰府の管理下で鞠智城の倉に収められていたとしている。

## 参考文献

伊藤武士 二〇〇六 『秋田城跡』 同成社

今泉隆雄 一九八九 「八世紀前半以前の陸奥と坂東」『地方史研究』三九―五

今泉隆雄 二〇〇六 「郡山遺跡の時代」『東北―その歴史と文化を探る―』東

北大学出版会

岡田茂弘 二〇〇六 「城柵の設置」青木和夫・岡田茂弘編『古代を考える 多

賀城と古代東北』吉川弘文館

亀田修一 二〇一四 「古代山城は完成していたのか」熊本県教育委員会編『鞠

智城跡Ⅱ―論考編Ⅰ―』

菅野成寛 二〇〇五 「鎮守府付属寺院の成立―令制六郡・奥六郡仏教と平泉仏教の接点―」人間田宣夫編『東北中世史の研究』高志書院

進藤秋輝編 二〇一〇 『東北の古代遺跡 城柵・官衙と寺院』高志書院

鈴木景二 一九九八 「弥勒寺・四王寺・観法寺」『金沢市史会報』三

鈴木拓也 一九九四 「古代陸奥国の官制」『古代東北の支配構造』一九九八年

所収、吉川弘文館

田中俊明 二〇一四 「朝鮮三国における八角形建物とその性格」熊本県教育委

員会編『鞠智城跡Ⅱ―論考編2―』

田平徳栄 一九九三 「基肄城考」『九州歴史資料館開館十周年記念大宰府古文  
化論叢』上巻、吉川弘文館

鶴嶋俊彦 一九九七 「肥後国北部の古代官道」『古代交通史研究』七

虎尾俊哉 一九八九 「古四王神社と四天王寺・四王堂」『古代東北と律令法』

一九九五年所収、吉川弘文館

能登原孝道 二〇一四 「菊池川中流域の古代集落と鞠智城」熊本県教育委員会

編『鞠智城跡Ⅱ―論考編1―』

菱田哲郎 二〇〇五 「古代日本における仏教の普及―仏法僧の交易をめぐる―」

『考古学研究』五二―三

平川 南 一九八四 「山形県道伝遺跡の木簡」川西町教育委員会『道伝遺跡発掘

調査報告書』のち一部が『漆紙文書の研究』一九八九年、吉川弘文館に転載

平川 南 一九九二 「古代東北の豪族」『新版古代の日本 九 東北・北海道』

角川書店

平川 南 一九九三 「多賀城の創建年代」『古代地方木簡の研究』二〇〇三年

所収、吉川弘文館

平川 南 二〇〇〇 「墨書土器「観音寺」―多賀城市山王遺跡」『墨書土器の

研究』吉川弘文館

広瀬正照 一九八四 「寺院址各説 十蓮寺廃寺」『肥後古代の寺院と瓦』

堀 裕 二〇一三 「多賀城廃寺小考」『東北アジア研究センター報告』一〇

松本雅明 一九六五a 「菊池郡寺・郡家跡調査―その概要と意義―」『肥後の

国府と古代寺院址の研究（松本雅明著作集3）』一九八七年所収

松本雅明 一九六五b 「古代肥後の復元―菊池郡寺（十蓮寺）跡―」『肥後の

国府と古代寺院址の研究（松本雅明著作集3）』一九八七年所収

三上喜孝 二〇〇四 「古代の辺要国と四天王法」『山形大学歴史・地理・人類

学論集』五

三上喜孝 二〇〇五 「古代の辺要国と四天王法」についての補論」『山形大学

歴史・地理・人類学論集』六

向井一雄 二〇一四 「鞠智城の変遷」熊本県教育委員会編『鞠智城跡Ⅱ―論考

編2―』

森 郁夫 一九九八 「造営技術僧の活躍」『日本古代寺院造営の研究』法政大

学出版局

山中敏史 二〇〇五 「地方官衙と周辺寺院をめぐる諸問題―氏寺論の再検討―」

奈良文化財研究所編『地方官衙と寺院―郡衙周辺寺院を中心として―』

山村信榮 一九九八 「国境における古代山城と仏教（軍事から宗教へ）」『都府

楼』二五

李陽浩 二〇一四 「古代東アジアにおける八角形建物とその平面形態―前期難

波宮東・西八角殿研究への予察―」中尾芳治・米原永遠男編『難波宮と都

城制』吉川弘文館

熊本県教育委員会 二〇一二 『鞠智城跡Ⅱ―鞠智城跡第8―32次調査報告』

挿図出典

第1図 伊藤武士二〇〇六を改変

第2図 岡田茂弘二〇〇六を改変

第3図 森郁夫一九九八を改変

第4図 熊本県教育委員会二〇一二

第5図 李陽浩二〇一四を改変

第6図 熊本県教育委員会二〇一二を改変